

今年のお題

「最高のアウトドア」～私の流儀～

顧問 熊野谿 寛

またまた合宿がつぶれると、「流儀」という程のものを持たない、持てない部員たちも多いかもしれない。ただ、この「野外活動部」には、**実に様々な「流儀」が伝統的に続いてきた**。もっとも「頑固に押し付けてきた」のかも知れないが。(^_-) ☆

まずはかなり怪しい奴から紹介しよう。

「焼肉は人の上に人を作らず」 BBQ では、気を付けないと箸をつけた肉でも、口に入るまでは横から奪われしまう危険性が高い。下級生が上級生の肉を奪う下剋上もコロナ前には日常だった。さしあたり「万人の万人への闘争」のありさまとなるのだが、昔はもう少し遠慮があった。多分、これは数年前の藤井部長の代からだ。ちなみに BBQ では、まずは山のような野菜を焼き、それで腹が膨れた後に肉を焼く。これはビジタリアンの藤原君がいた時からの伝統だ。

「食べれば資源、残せばゴミ」 キャンプの後、ゴミはすべて持ち帰りが鉄則。生ごみから腐った汁が垂れたら大変。だから「残さず食べる」「好き嫌いは厳禁」となる。残りそうだと「ノルマ」として割り当てる。トマトのノルマに泣いた部員も。「好き嫌いが減りました」と保護者に感謝(?)されたこともあった。

これでは、「**ワンダー・ラーゲリ**じゃん!!」と言われかねないので、(ラーゲリは言うまでもなく収容所)、結構真面目にやってきたものについて書こう。

「安く、楽しく、安全に」 創部の時からいつも念頭においてきた。もともとは安保闘争期に生まれた「勤労者山岳会」から発展した日本勤労者山岳連盟(労山)の初期スローガン。私たちにはそれぞれの人格を尊重される権利と幸福追求の権利があり(日本国憲法 13 条)、その一つの側面として豊かな自然に触れたり、山岳スポーツを楽しんだり、野山を歩く権利がある。その「権利としてのアウトドア」をどのように生涯を通じて求めるのか、そのベースになる経験を「安く」「楽しく」かつ「安全に」求めたい、という事だ。青春 18 切符を使ったり、テント生活を基本としたのも、そんなことが基本にある。

「雪を楽しむ、スノーキャンプこそが最高」 そして、一番大切にしてきたのは、3 月末に谷川岳山麓・湯檜曽川で行うスノーキャンプだ。神奈川や東京では経験できない雪の中でのキャンプ。少し慣れると最高の遊び場になる。トイレを掘って作り、雪洞を掘って泊まり、外にテーブルを作って昼食会、ソリ遊び、拳句は「雪の中の海水浴??」も。何より確実な生活技術の習得が求められ、これを経験すると無雪期のキャンプは「天国の様にラクダ」と感じるようになる。

もっとも、これをやるには安全な場所の選定、雪崩についての知見や天候についての判断、基本的な雪山での技術と経験などなどが必要になる。場所は毎年同じになったが、それが逆に彼らが経験を積んで自由に遊べる条件ともなった。「土合なくして野活なし」と言っても良いだろう。

「自分で計画して、自分で失敗しよう」 夏合宿については、部員たちが行く場所を探して、候補地を決定することを大切にしてきた。最初は「秘境に行きたい」と言われて、「和賀山塊」に旧・沢内村から行ったりもしたが、このところは**端末を皆が持っている**ので、「自分たちで一から探せ」となる。ただし、「車がなくて行ける」「部の団体で使える規模がある」「公共の交通機関で行くことが可能」「買い物をする場所まで行ける」「最後には入浴もして帰れる」などの事は条件として必要になる。ともあれ、「どうやって行くのか」までは調べないと話にならない。

自分たちで調べて計画を考える、ここは楽しいだろうかと想像する。実は**そんなプロセスこそが一番楽しく、自分が生涯に何かを続けるうえでは大切な経験**なのだと思う。本当は、それを交通機関の手配などのすべてについてもできたらよいのだが、残念ながらここは顧問の出番となる。いわば部員の思いが**おぼろげに形になり**かったら、**それを実際の形に組み立てる**のだ。

しかし、**実際の夏合宿は彼らの戦場**となる。飯は自分たちで作ってもらう。私はさっさと作って食べて、横からあれこれと助言するだけだ。いろいろ失敗も起きて、「伝説」として語り継がれる場合も多い。それが彼らにとっての部の「**伝統**」になっていくのだろう。失敗ほど語り継がれ、鮮烈に焼き付くものもないのだから。

さて、以上のようなことを 20 数年間の顧問生活でやってきたのだが、これも長くてもあと一年と少しになった。

顧問を始めた時には、山から生活の距離の広がる時期だった。しかし、その後に山岳会に入りなおして、雪山も、岩登りも、沢登りも、氷壁も、結構な熱量で取り組んだ。私は偶然にも何度かの危機を運よく生き残ったが、何人かの仲間を山で失った。その**生命の痛み**は決して消えないが、**自然の中の活動ではありうる**ことだと思う。

しかし、学校の部活動では「生命にかかわる事故がない」ことが絶対的に求められ、芦別岳遭難事件の様に山岳部の顧問に刑事責任が問われた事例もある。だからこそ**「現役で山や自然に向かい続け、真剣に生命と安全を見つめ続ける」**ことが、**この部の顧問を続ける条件**であると思う。そんなことをしながら、こんなヘンテコな部活を共にやりたいという教員はどうも見当たらない。また、こんな役目は無理に誰かに頼めるものでもない。自分の意志で顧問をやる人がいなければ歴史を終えるのが筋だ。

この 5 年ほど、忙しくてロクに厳しい山に向かえていないが、まだやり直しは効くだろう。定年前にハケ岳山麓に小さな小屋を手に入れたので、リタイヤしたら二拠点生活しながら暮らしたい。半分は山と向き合い、半分は無線機を作り、他にもやりたいことはたくさんある。何はともあれ、**毎日に何かしらを考えて試してみたい**。

「自分で考えて試し、失敗してまた考える」という事が、多分、私のアウトドアだけでなく。人生での一番の「流儀」なのだから。